

# 市民協働でつくる まちづくりの拠点 ワークショップ



## vol.3 「しくみ」について考える

1 1 月 1 8 日

ゆめりあうじ

中宇治地域の新たな市民活動の拠点づくりを市民協働で進めるためのワークショップ第3回目を行いました。最終回のテーマは「しくみについて考える」ということで、岐阜県にて設計業務をしながらまちづくり会社を経営されている末永三樹さんから、持続的に公共空間を運営していくための考え方についてお話していただきました。その後グループに分かれ、どんな条件・内容・主体で運営していくべきかについて議論を交わしました。

### 日常に根付いた 仕組みをつくる

末永さんは、岐阜市の柳ヶ瀬商店街でまちづくりに関わってこられました。その中で、無償での活動には限界があり、活動を継続していくために事業化することが必要だと気づき、まちづくり会社を設立されたといいます。そして、より持続的にするために、日常に根付いた仕組みをつくることを大切に、商業の場ととらえがちな商店街において、そこでの暮らしや生業に目を向けた取り組みをされています。毎月第3日曜日に

行っていた、こだわりの品を扱う店が並ぶ「SUNDAY BUILDING MARKET」は、その輪が広がり、第3日曜以外にも行われるようになっています。

また、公共施設のとらえ方についてもお話していただきました。利用制約が多く使いづらい印象がある公共施設でも、「せっかくだから面白くなって使ってみよう」という思いをもつことで活動が始まるといいます。一方で、行政等が運営していなくても、多くの人が出入りする場であれば公共空間であるとも話され、シェアスペース・キッチンを備えた「デイリーコヤナギ」を紹介していただきました。シェアハウスの住人とその友人、シェア本棚の出店者と利用者など多くの人が訪れており、自分たちがまちをつくっているという手ごたえを感じられる場所となっているといいます。

自分たちが楽しく暮らすために始めたことが新しい日常になり、まちづくりの土壌となっていくというお話は、ワークショップを重ねた参加者にとっても思い当たる部分が多かったようです。

### それぞれの視点で考える

ワークショップは、前回と同じグループに分かれ、3つのステップで行いました。

まずは、利用者・運営者それぞれの立場から公共施設の利用条件について考えました。例えば2班では、「利用時間は、自分が利用者なら土日が良いが、運営者なら平日の日中がありがたい」という意見が出ていました。立場によって望ましい利用日・時間帯・料金等が異なることに気づき、どのように運営するのがよいかについて考える起点となっていたようです。



2023年11月18日(土)

13時30分-16時30分

会場:ゆめりあうじ

参加者:26名

ファシリテーター:6名

(レクチャー)

末永三樹(ミュキデザイン代表取締役)

柳ヶ瀬を楽しいまちにする(株)

クリエイティブディレクター



## どんな仕組みで 運営するか

2つ目に、公共施設をより活発かつ持続的に運営していくために、どのようなプログラムや用途と連携するのがよいかを話し合いました。例えば1班や5班では、「行政だけでなく市民も参加して運営をするなら、今までの枠組みではできなかったことができるようになる」という、発想を転換するような議論が見られました。従来の公共施設が持っていた機能だけでなく、自分たちがあったらいいと思うことをベースに多くのアイデアが出されていました。

3つ目として、それまでの議論で挙がった利用条件やプログラム・用途を実現しうる運営主体を考えました。利用者が運営に参加するという意見が多くみられたことが印象的です。また、6班では、「時間帯によって管理者が変わるのもよいのでは」という柔軟なアイデアが出ていました。一方で、新しい仕組みの中で行政にどのような役割が求められるかという話題も上がり、議論が白熱する班もありました。



これらを踏まえ、宇治公民館跡地と菟道ふれあいセンターそれぞれで、①どのような連携の仕組みを②どんな主体が担うかについて、各班が発表しました。

各班の発表を受け、末永さんからは、「共通点も多く参加者の視点がある程度そろっているように思う」との感想をいただいた上で、「実行するまでが大事で、かつハードルが高い。今回挙げた担い手をより具体的にイメージし、試してみしてほしい。また、なぜ今交流の場所を作るのかを考えることで、宇治市ならではのまちづくりができるはず」というアドバイスをいただきました。

全3回のワークショップを終えて、参加者からは、「公共施設とは何かを考え直すきっかけになった」「今まで考えたことのないことで刺激になった。今回参加していない人も含め、どうやって周りを巻き込んでいくかが大事だと思った」といった感想が聞かれました。また、「ここまで話して、来年以降どう進めるのか。実際に試してみる仕組みがあるといいのでは」というような、実現のための積極的な意見もいただきました。市民同士の活発な議論がみられたことは、市民協働による拠点づくりのための大きな一歩となります。これらを踏まえ、実現に向けて取り組んでいきます。

1班

### 景観の良さを活かし、観光客も使える場所へ

- ・地元の方や留学生が、異文化を学べる教室などの交流の場を運営する
- ・イベント会社などプロフェッショナルが、コンサートなどを開催する

2班

### 特定の目的で使える広く開かれた場所へ

- ・民間事業者や駆け出しの人が、チャレンジショップを運営する
- ・利用者が、広場を管理・運営する

3班

### 多くの人が集まるレジャー施設へ

- ・女性の多い組織が、パウダールーム等を備えた多機能複合ドームを運営する
- ・地元の学校や、経営に挑戦したい人が、イベント会場として運営する

4班

### 地域内外の人が集い交流する場所へ

- ・学生や誰でも市民団体が、レクリエーション施設を運営する
- ・お年寄り・主婦・子どもが、小商いなどにチャレンジできる場所を運営する

5班

### 景色や自然を活かした場所へ

- ・中間支援団体が、健康促進活動や学びのイベントを運営する

6班

### 川を活かしたアウトドアなどの活動ができる場所へ

- ・平日は市民やサークルが、施設的な面は事業者が管理し、月に1回共同で清掃しながら運営する

## 菟道ふれあいセンター

### 子どもたちの遊び・学びの場所へ

- ・地元の店舗や住民が、農業や抹茶等の体験プログラムを運営する
- ・子育て世代が、フリーマーケットやキッズコーナーを運営する

### 誰でも気軽使える場所へ

- ・親世代・子育て支援団体・大学生・高齢者が、子どもの居場所や教室、高齢者の憩いの場を運営する

### 多世代が集う多機能複合施設へ

- ・保育士が、保育園を補完するような機能のある施設として運営する
- ・学校や英語が得意な学生が、異文化交流の場を提供する

### 多世代の地域住民が居心地よくすごせる場所へ

- ・学生・主婦・主夫や利用者が、コミュニティカフェを運営する
- ・教室を開きたい人が、学びの場所を運営する

### 地域の人も観光客も立ち寄れる場所へ

- ・市内の高校生・大学生が、利用権付きボランティア制でイートイン付き自習室を運営する
- ・カフェバーを開きたい人が、同じ趣味の人と出会う場所を、施設利用料を集めながら運営する

### まちのセンターで多世代、観光客をつなぐ場所へ

- ・まちづくり会社やNPO・民間事業者・利用者が、オープンデイやユーザーミーティングで意見を交わしながら運営する

